

台湾における木材需給の動向と合板等の製造及びニーズについて

井上 幹博（一般社団法人日本木材輸出振興協会 事務局長）

1. はじめに

台湾では、日本と同様に木質パネル需要に占める合板やブロックボードの使用量が大きく、約7割を占めている。

近年では、合板の年間需要量は110万～120万 m^3 にのぼり、うち現地生産は50万 m^3 （普通合板10万 m^3 弱、ブロックボード40万 m^3 強）、また、マレーシア、インドネシア、中国大陸等からの輸入合板は60万～75万 m^3 にのぼっている。輸入合板は、主に二次加工合板製造用の中間資材、型枠用やフロア台板として利用されている。

合板の用途の中で、コンクリート型枠用合板・型枠用製材板の年間消費量は20万 m^3 で、うち型枠用合板は14万 m^3 （輸入品12万 m^3 、台湾産が2万 m^3 ）、型枠用製材板は6万 m^3 であることから、現地の仕様やニーズを踏まえて工夫すれば、日本産型枠用合板の台湾向け輸出の可能性も大きいものと考えられる。

このような背景を受けて、一般社団法人日本木材輸出振興協会では、日本合板工業組合連合会と共同で、日本産合板（特に、コンクリート型枠用合板）の輸出増加が期待される台湾を対象に、台湾区合板製造輸出業同業公会（TPMEA）等の合板業界全国団体や現地の有識者の協力を得て、台湾における木材需給の動向や合板等の製造・ニーズ及び用途、さらに、現地市場に求められる合板の仕様、性能、嗜好といったマーケット情報について調査を行った。

2. 台湾の木材需給

2.1 台湾の森林セクターの概要

台湾の国土面積は360万haで、九州とほぼ同面積であるが、人口は2,350万人と九州の2倍近く、人口密度は600人/ km^2 を超えている。

森林面積は210万haで、森林率は58%となっている。森林内容は、天然林153万ha、人工林42万ha、その他が15万haで、人工林率は20%と日本の半分程度にすぎない。人工林の蓄積は4,700万 m^3 で、ヘクタール当たりでは112 m^3/ha と日本の半分強程度の蓄積状況であり、人工林の資源内容は豊かであるとは言えない。人工林の植林樹種は、日本スギが4万～5万haと最も多く、ついでコウヨウゼンが1～2万haであり、台湾ヒノキも植栽されている。また、広葉樹では、郷土種のアカシア、クスノキ等が植栽されている。

伐採量は年間4万5千 m^3 （2014年）とわずかであり、一方、ボード類を含む木材輸入量は500万 m^3 （2013年）であることから、木材自給率はわずか1%にすぎず、国内木材需要のほとんどを輸入に頼っている。

台湾では、このような国内の木材需要に対処するため、木材製品の関税を原則0%としており、輸入の促進に努めている、ただし合板のみは、国内合板産業への保護対策もあってか、広葉樹合板に限って関税が課せられている。具体的には、表面の片側のみでも広葉樹材であれば関税対象になり、加工なしの場合は8.5%、加工がなされている場合は12.5%の関税が課されている。

2.2 台湾における木材生産の経緯

1960～1970年代には、台湾では、木材製品が主要な輸出品であり、大径木の台湾ヒノキが日本へ輸出されていた。その後、資源・環境問題から1992年には、天然林の商業ベースでの伐採が禁止され、木材自給率が大幅ダウンすることになった。これ以降、台湾では、国内の木材需要をもっぱら外材に頼ることとなり、最近では、木材自給率は1%程度にまで落ち込んだ状態が続いている。

しかし、最近では、人工林の資源が徐々に充実してきていることから、台湾政府は、国産材の利用を推進し、木材自給率を今後5年以内に3%にまで回復させることを目標としている。

2.3 品目別の需給の概要

ア 丸太

台湾の使用原木は、9割以上を輸入に頼っており、2015年の原木輸入量は55万 m^3 で、前年比では25%減少した。仕入先別には、マレーシアが最も多く22万 m^3 で全体の40%を占め、ついでニュージーランド9万 m^3 、日本8万 m^3 、PNG 4万 m^3 となっている。針葉樹原木は輸入量の72%を占め、ニュージーランドからのラジアータパイン、日本からのスギが主要な輸入樹種である。

イ 製材

台湾における製材業は約150社あるが、4人以下の企業が半数を占め、50人以上の企業は2社のみと規模は非常に小さい。このような状況から、製材は主に輸入に頼っており、2015年の輸入量は130万 m^3 で、前年比では1%の減に収まった。

主な輸入仕入先は、2015年にカナダが49万 m^3 で全体の38%を占め、ついでヨーロッパ15万 m^3 、米国15万 m^3 、マレーシア14万 m^3 、ニュージーランド9万 m^3 等となっている。

輸出は、2万 m^3 足らずであり、輸出先は中国大陆や日本となっている。

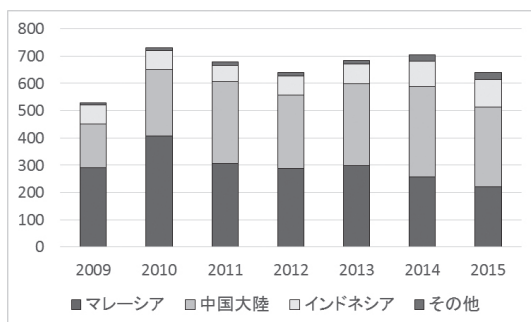


図1 台湾の仕入先別合板輸入量（単位：千 m^3 ）
出典：PLYWOOD INDUSTRY IN TAIWAN

ウ 合板

台湾の合板産業は、2015年にLVLを含む国内生産量が1万 m^3 で、総供給量の25%にあたり、国内市場でのシェアは苦戦している。

年次別の合板輸入量は図1のとおりである。2015年の輸入量は、64万 m^3 で前年比では9%減少している。輸入仕入先は、中国大陆46%、マレーシア34%、インドネシア16%等となっている。

一方、2015年の合板の輸出量は2万 m^3 弱と量的には小さく、また、前年比で33%減少している。輸出先としては、日本が61%を占めている。

エ ブロックボード

台湾では、ブロックボードは木質パネル類では最も利用が多く、主に内装、化粧パネル産業に使用されている。

台湾国内での生産量も多く、2015年の総生産量は42万 m^3 であり、前年比では18%減となった。輸入は少なく、1万 m^3 弱程度で、主に中国大陆から輸入している。

オ 単板

主に輸入に頼っており2015年の単板輸入量は、前年比10%増の25万 m^3 である。

主要な輸入仕入先は、マレーシアが11万 m^3 と全体の44%を占め、その他にベトナム、中国大陆、カナダ等から輸入されている。



写真1 壁は型枠用製材板により、床と天井は型枠用合板によりコンクリート施工



写真2 天井の棧材に使われるLVL

カ 繊維板

全て輸入に頼っており、2015年の輸入量は、前年比12%減の14万 m^3 となっている。

主要な輸入仕入先は、タイが7万 m^3 と全体の49%を占め、その他にマレーシア、ニュージーランド、インドネシア等から輸入されている。

キ パーティクルボード

全て輸入に頼っており、2015年の輸入量は、前年比4%増の33万 m^3 となっている。主要な輸入仕入先は、タイが10万 m^3 で全体の30%を占め、次いでルーマニアが8万 m^3 で23%、ベルギーが5万 m^3 で15%、他にオーストリア、フランス、カナダ、中国大陸等から輸入されている。

2.4 需要の特徴と需給の今後の動向

台湾においては、ブロックボード、合板は、自給率が比較的高いが、その他は輸入に多くを依存している。需要は、主に住宅の家具、床、壁、天井等の内装用とコンクリートの型枠用である。**写真1**、**写真2**及び**写真3**はそれぞれの使用例である。

木材需要は、住宅建築業が主体となっており、2015年の住宅建築許可の申請件数は、10万4千件であった。前年比では16%の減となっているが、2016年には、さらに30%以上



写真3 スギのコンクリート型枠用製材板

の減になっていると見られ、この先5年間程度は低迷傾向が続いていくものと見込まれる。

台湾では、木造住宅は、年間100棟程度しか建設されておらず、需要は極めて少ない。木造建築物が建てられない理由としては、シロアリ被害が深刻であることのほか、設計士・建築士の不足、木材が他の素材に比べて高価なこと、住宅ローンの融資期間が、鉄筋コンクリート造は20～30年となっているのに対して、木造住宅では10年しか認められていないことなどが理由とされる。

3. 台湾の合板流通の現状

台湾における輸入合板製品の流通は、「輸入業者→流通業者・2次加工業者→工務店」

が主流と思われる。一方、国内合板製品については、「製造業者→流通業者又は工務店への直納」が見られた。

コンクリート型枠用合板の市売価格については、輸入型枠と国内産型枠では大きな差異は見られない。ただし、型枠用合板はパネル製材より30%程度高いようである。

フロア用等の主要流通業者は、多くの輸入製品を扱っており高級品も多く、品揃えは大変豊富である。

4. 台湾向け合板輸出の展望

4.1 台湾への木材輸出の概況

日本から台湾への木材輸出は、スギ丸太を中心に行われてきており、コンクリート型枠用製材板を中心に利用されてきたが、近年建設物件の減少もあり、減少傾向にある。

製材品輸出は、まだ、数量は少ないが、ヒノキを中心に少しずつ伸びてきている。

また、合板については、日本の合板はベニアコア合板であるが、台湾の合板は主にブロックボードであることから、日本からの合板輸出は僅少量にとどまっている。

しかし、ヒノキや日本のつき板への関心は高く、今後、住宅用の化粧合板やコンクリート型枠用合板の需要が増大する可能性はあるものとみられる。この場合、価格が最大のポ

イントであるものの、日本製合板の性能、品質は特に問題はないとの意見が多かった。

4.2 台湾向け合板輸出可能性と展開の方向性

近年、日本は、台湾の主要な原木輸入仕入先の一つとなっている。

日本からの輸入はスギの小中丸太が主体であり、その用途は、コンクリート型枠用が85%、壁板10%（8～12cm小径材及び12～25cm中径材）、家具や棺桶が5%（大径材26～40cm以上）とのことである。

今のところスギは、台湾産材や他の輸入材の代替として一定の市場を確保しているが、台湾国内の建築業の景気減退により、この先5年程度は、輸入量は低迷状態が続くものと予測されている。

また、合法木材の使用については、国際的に木材の合法性が要求されるようになってきているため、この点についても早急な対応が必要であろう。

今後、我が国から台湾への木材輸出拡大を進めていくためには、日台双方が協力し、我が国の沖縄など亜熱帯地域における木材の耐久性や防蟻対策を紹介するなど、木材利用や技術交流を深めるとともに、我が国では木造住宅に関する法規制や住宅ローンの支援により木造住宅が広く普及していることを踏まえて、台湾の住宅着工増大のための金融・税制等の具体的な政策助言や木造住宅の普及等を行い、新たな市場開拓を行っていくことが重要である。

また、台湾では、日本製品に対する信頼度が高いことから木材製品での「Made in Japan」表示を行うなどのブランド化戦略も有効であろう。

参考文献

- (1) PLYWOOD INDUSTRY IN TAIWAN June 2016
Taiwan Plywood Manufacturers & Exporters Association The Republic of China



図2 日本から台湾への木材輸出（千m³）
出典：財務省統計